

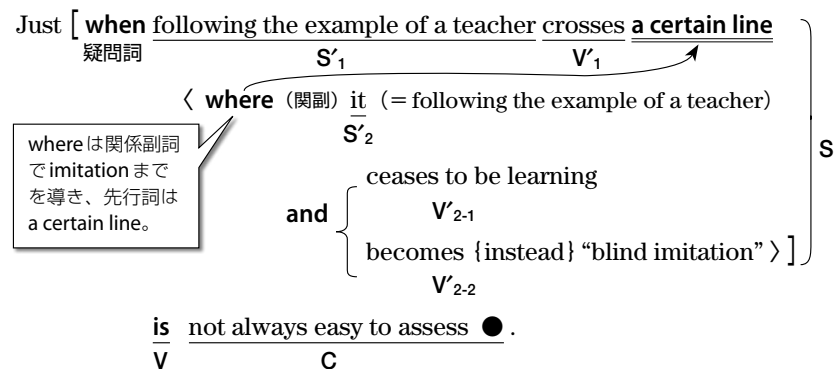
**例題 1** Just when following the example of a teacher crosses a certain line where it ceases to be learning and becomes instead “blind imitation” is not always easy to assess.

**Notes** cease 「～をやめる」 blind 「(信頼が) 盲目的な」 asses 「～を評価する」

when がきた時点で「...するとき」と決め込んでいないでしょうか? when には接続詞以外にも、疑問詞「いつ...するか」の用法もあります。

- I don't know **when** he got back to New York.  
「彼がいつニューヨークに戻ったのか知らない」

また、疑問詞節はすべて名詞節となります。名詞節ということは、主語になることもできるわけです。(上の例文の場合、when 節は know の目的語になっています)



when 節 (名詞節: いつ～するか) は imitation までを導き、全体は動詞 is の主語であると同時に assess の目的語 (本来は●の位置にあるはず) を伴っています。複雑に見えますが、この文の大枠は次の通りです。

when ... is not always easy to assess

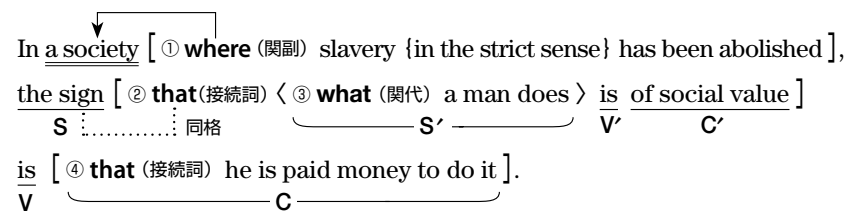
S V C

要するに、He is hard to please. (彼は喜ばせるのが難しい→彼は気難しい) と同じ構造の文ということになります。やはり、He が is の主語であると同時に please の

目的語としても働いているのがわかります。なお、instead の後ろには of learning を補うことができ、blind imitation と対比関係を成しています。(⇒ No.2 例題 2)  
次は短い文ながら、多くの節が入り組んでいます。

**例題 2** In a society where slavery in the strict sense has been abolished, the sign that what a man does is of social value is that he is paid money to do it.

**Notes** slavery 「奴隷制度」 be of ~ value 「～の価値がある」



ここでは節が4つ登場しています

- ① where = 関係副詞 → abolished までを導き、先行詞 a society を修飾
- ② that = 接続詞 → value までを導き、the sign と同格になる
- ③ what = 関係代名詞 → 全体は does までの名詞節で、is の主語になる
- ④ that = 接続詞 → 全体は it までの名詞節で、直前 is の補語になる

節をまとめてとらえることは、構文把握の大きなカギとなります。

→ **これが真相!** ←

**節の切れ目(どこまでか)を押さえないと、誤読の危険性あり!**

👉 **同時に全体をひとまとめにする考えを徹底する**

**訳例**

1. 教師の範にならうことが、学習でなくなり、「猿まね」となる一線をいつ越えるのかということは、常に容易に判断できるとは限らない。
2. 厳密な意味での奴隷制度が廃止されてきた社会においては、人のすることが社会的な価値があるという証拠は、お金をもらってその仕事を行っているということである。